

## 第5回

## 見る角度・アングル

～構図が伝えるメッセージ～

美術教育監修・執筆

上野行一

美術の表現を行うときに、アングルと構図は重要な要素と言える。映画やテレビの映像や広告表現、漫画やアニメなど身近な日常生活の中にも、アングルや構図を工夫した効果的な表現が見られる。今回は、アングルとは何か、構図の違いによる印象の変化、構図による印象と構図をいかした表現方法を学ぶ。

学習前  
チェック!

アングルと構図は混同されやすい。まずその違いを理解しよう。アングルや構図に注目することは表現や鑑賞の幅を広げることにもなる。主題を効果的に表現する手段として、また、鑑賞の手がかりとして活用できる。

## アングル・構図とは

対象を見る角度のことをアングルという。主なアングルには上から見下ろす「俯瞰」、目の高さの「水平アングル」、下から見上げる「ローアングル」の3つがある。アングルの違いによって見る人に与える印象が変わってくる。目の高さで対象を捉える水平アングルは最も一般的なアングルであるため、見る人に自然な感じや安定感、安心感を与える。下から見上げるローアングルは大きさが強調されるので、威圧感や迫力、力強さを感じさせる。

画面全体の構成を構図という。アングルは同じでも構図が変わると印象が変わる。番組では同じアングルでとらえた人物を3つの構図で配置し、その印象の違いを説明する。主題(表したいこと)を表現するうえで、効果的なアングルと構図を考えよう。

## 構図による印象

構図によって視線が誘導されることがある。番組で紹介するファン・サンチェス・コタンの静物画は、左上から右下へと視線が誘導される。そのことによってどのような効果が生まれるだろうか。私たちは描かれたマルメロの実、キャベツ、メロン、胡瓜きゅうりを追って、一つずつ子細に見ることになる。全体を漠然と眺めて終わるのではなく、部分をしっかり見るように促されるのだ。

アングルはやや上からの俯瞰であり、目は線遠近法に導かれて漆黒の奥面へ吸い込まれる。しかも遠近法の消失点から垂線を下ろすとメロンの切断面に行き当たるので、私たちの視線は俯瞰して見たメロンの切断面にしばし留まる。誘惑を暗示するマルメロの実から多産を意味するメロンへと導かれ、自由に想像を広げるのも楽しい。



## 構図をいかして表現する

構図が変わると印象が変わる。そのため、構図をいかして表現するには、まず主題（表したいこと）を明確にすることがもっとも大切だ。そのうえで何をどのように配置するかとか、どのような角度から見て表すかなどを考える。

アングルや構図の効果を考えるのは大切なことだが、それを優先して表現するとしたら本末転倒になる。主題をよく練り、それを効果的に表現する手段として活用しよう。

